雑誌の運命

―『幼児の教育』創刊一〇〇巻記念に寄せて―

本田　和子

「雑誌」というメディアの誕生

ハンブルクの神学者ヨハン・リストが、世界最初の雑誌形態の文書を世に贈ったのが、一六六三年とされている。雑誌に「マガジン」という呼称が与えられたのが、一八世紀半ば。イギリスの印刷業者エドワード・ケープの創刊になる『ジェントルマンズ・マガジン』の大ヒットがその呼称の定着を促し斯界を活気づけて、矢継ぎ早に各国で各種の雑誌が発刊されるようになった。

イギリスの『レビュー』や『エグザミナー』、あるいはアメリカ合衆国の『ニューヨー

ク・マガジン』『マサチュセッツ・マガジン』など、一八世紀は、評論誌の全盛期であり、政治・外交・文化等を素材とする評論が筆鋒鋭く誌面を飾り、当時の為政者たちは印紙税を課すなどして批判を押さえようと企図したと言われている。政府当局をも恐れさせたという雑誌の威力は、一号毎に主題が選ばれつつ定期的に継続刊行されるというその形態に起因するところ大であったと言うべきだろう。何しろ、事が起こればすかさずそれを取り上げることが出来、一号で論じ尽くせぬ時には、より詳細な取材を重ねつつ、同じ主題を次号で継続することが出来る。時事問題の主題化と論評、その掘り下げという、一般書の担い得ぬ役柄を、見事に担って見せたのが新進の出版物「雑誌」であったのだ。

わが国の場合、一八六七年、柳川春三による『西洋雑誌』がその嚆矢とされている。主たる内容は、オランダの雑誌からの重要記事の翻訳紹介であり、幕府の洋書調所の洋学者たちがその任に当たった。

そして、明治近代化とともに、雑誌は出版界の花形となる。森有礼や福澤諭吉による『明六雑誌』、あるいは徳富蘇峰の主宰する『国民の友』などが、時代の世論をリードしたことはよく知られている。知識人たちは、毎月刊行されるこれら雑誌を手にして、その時々の特記すべき出来事に注目し、それに対する有識者たちの見解を知ることで、時代に対して開かれた目を持

つことが出来た。目を開かれる、すなわち「啓蒙」こそが、初期の時代の雑誌の目的であったろう。

ここで、「啓蒙」という性格を、あえて「初期の時代」と限定したのは、やがて、娯楽や情報を主内容とした「大衆雑誌」が出現するからである。二〇世紀に入ると、『講談倶楽部』や『キング』に代表されるような大衆娯楽雑誌が創刊されて、とりわけ『キング』は、「一〇〇万部の国民雑誌」とその隆盛を誇るようになる。この時代に、雑誌は知識人の独占物ではなく、広く一〇〇万に及ぶ人々の暮らしのなかに入り込み、彼らの身近にあって彼らを楽しませるものと化したのである。

二〇世紀の女性誌

『明六雑誌』の創刊は一八七四年、『キング』の創刊が一九二五年である。僅か五〇年の間に、斯界に一〇〇万部の部数を誇るマンモス雑誌が出現する。このことが物語るのは、出版物としての「雑誌」の持つ独特の性格であろう。すなわち、誌面を飾るのは、複数の著者による複数の評論や複数の小説、そして、一編が長くとも一〇ページ程度、短い場合は数ページで一編が完成している。ということは、一つの評論、あるいは小説を読むのに、何ほどの時間も必要としないということなのだ。

人々にとって、雑誌は、単行本と異なり、気軽に手にして、ほんの少々の時間で読み終えることの出来る媒体だった。雑誌を読むために、わざわざ読書の時間を設定すること

も、また、威儀を正して机に向かうことも、いずれも不要。単行本と同様、紙面に印刷された活字の群れでありながら、それは、読者に対して何ら仰々しい構えを要求せず、いとも手軽に活字と戯れることを許してくれる。大衆雑誌の出現がなければ、およそ、読書などいう行為と無縁に過ごしたかも知れない人々が、自身の楽しみとして活字に目をさらすようになったのは、雑誌に備わっていたこの性格、すなわち、短時間で読めて肩肘張ることのない手軽さのおかげだったと言えよう。

さて、わが国最初の本格的な幼児教育誌とされる『幼児の教育』（発刊当時は『婦人と子ども』）誌は、明治三四年、二〇世紀の幕開けとともにその歩みを開始している。「児童教育法の研究」「婦人教育殊に母としての婦人教育の普及」「家庭に向かって好個の読書材料を供給する」、いずれもわが国教育界の急務として掲げられた以上三つを発刊の目的に掲げて、荒木十畝の考案になる撫子と母蘇の図柄に彩られ、『婦人と子ども』と高嶺秀夫の題字が寄せられた本誌は、幼児教育者と家庭婦人向けの贈り物であることを高らかに謳っていた。その書名の通り、子どもを核として女性の啓蒙が意図されていたのである。

ただし、『婦人と子ども』誌は、その誌名の示す通り、女性の最重要な役割を「子どもに奉仕する保育の営み」と特定し、そこに寸分の狂いもなく正確に照準を合わせている。扉に掲げられた「一人

の賢母は百人の教師に当たる」という高嶺秀夫の揮毫は、このことを物語って絶妙であった。一八八五（明一八）年に発刊された女性誌で、時代のオピニオンリーダー的な役割を果たしたとされる『女学雑誌』が、女性の使命として「ホーム」の形成を強調しつつも、婦人参政権や廃娼問題を常に巻頭に掲げて、人権論的・社会的論題を焦点化し続けたのに比して、本誌の視点は惑いもなく「子どもの養育」に当てられている。

二〇世紀は、「子ども」を中心化し、彼らを巡って旋回を始めた時代である。「児童中心主義」が新しい時代精神として高らかに鼓吹され、人々が「子ども」に希望を託しつつ明るい未来を望み見ようとしたのだった。「いまの人間よりは、次の世代の子どもこそがより進化した種として人類の進歩に貢献する」と、「進化論」が主導し、「優生学」が増幅させた「人権改良論」と、それに基盤をおく「子ども進化思想」は、幼い者を中心に押し出し、彼らに理想の人類像が仮託されて、未来を夢見ることを可能としたのだった。家庭婦人と保育者を対象とした保育雑誌は、こうした時代の心性の所産であり、明治以来女子教育を支えた「良妻賢母思想」と、新しい時代精神たる「児童中心主義」との申し子として姿を現したのである。

子ども関連誌に担わされた使命とその変貌

一八九八（明三一）年、子ども研究の新地平を開くことを標榜して、『児童研究』が発刊されている。児童心理学者の高島平三郎が主幹として編集責任を負い、帝国大学心理学

教授の元良勇次郎が祝辞を載せ、アメリカ心理学界を代表してスタンレー・ホールもメッセージを寄せるなど、賑々しい門出であった。『児童研究』は、その発刊の趣旨を次のように謳い上げる。すなわち、現今の人間に関する学問研究は、発生学に見られるように、「人間の基礎部分たる乳幼児期の解明」を不可避とし始めたこと、また、教育の基本には「子どもの科学的研究」を基礎づけねばならないこと、の二点であった。

『児童研究』は、その基底に、当時の新進科学たる「発生学」と「科学的児童研究、特に児童心理学」を選び取り、それらに関する内外情報の伝達と、それを解説した啓蒙記事とで内容を満たした。元良の弟子である新進気鋭の心理学者たちが、陸続と執筆陣に加えられる。執筆者のなかには、若き心理学徒倉橋惣三の名前も含まれていた。

それに遅れること三年、一九〇一（明三四）年に産声を上げたのが、本誌『幼児の教育』である。『児童研究』が普遍的子ども研究を意図し、読者対象も子どもにかかわる不特定多数の研究者と教育者を設定したのに比して、本誌のターゲットは、明確に幼児教育者と家庭婦人に絞られている。ここに見られるのは、一方では、幼児教育施設の普及とそれに連動した幼児教育の多様化・大衆化であり、他方、中産階級の成立に伴う「専業主婦」の確立であり、育児を重要使命と自覚させられた彼女たちの「母性意識」であろう。雑誌の使命が、彼女た

ちの啓蒙と実践指針の提供であったことは、こうした背景を如実に物語るものでもある。

本誌が一〇〇年に及ぶ歩みのなかで、その時々の変化に戸惑う保育者たちに、思慮深い情報提供を試みつつ混乱を回避し、見つめるべきものは「子ども」であり、耳を傾けるべきものは「子どもの声」であると、子ども中心主義的な本道を見失うことなく、不変の啓蒙に徹してきたとは、夙に指摘されているところであろう。第二次大戦後に簇出した同類誌のなかでも、本誌が際立ってその特色を誇示し続け、さながら「同人誌」のような同一カラーで彩られてきたのもこの所以であった。過去の一〇〇巻を繙くなら、本誌が保持し続けた「子ども中心主義」が仮初めのものではなかったと知られ、その使命感の一徹さに浅からぬ感慨を抱かされる。

ところで、予想を超えた現代のメディア状況の変化は、活字文化の急速な後退を余儀なくさせている。活字で綴られた書物や雑誌から知識・情報を得るよりは、インターネットで探し出した方がてっとりはやく豊富であるという、電子メディアの時代へと急テンポで突入しつつあるのが、わが国の現状であろう。「本を読む人」の減少と、「雑誌の売れ行き不振」が嘆かれているが、これは、必ずしも一過性の現象と言い得ないのではないか。かつて、口承文化と文字文化の交替劇が見られたように、活字メディアと電子メディアとの交替劇が、いま速やかに進行しつつあるのだから。

とすれば、訪れるメディア革命の時代に、「雑誌の運命」はどこに求められるのだろうか。書物のCD化が進み、ホームページを利用した雑誌の出現も、さほど遠い日のことで

はないかも知れない。しかし、それら、テクノロジー的な変化にもまして、雑誌の使命に要請される変化とは一体何であるのか。

情報提供やそれに伴う啓蒙に関しては、伝達の速度という点から活字メディアは電子メディアに劣るだろう。特に、月に一回の刊行物である「雑誌」に関しては……。しかし、媒体を通して、一言一言、一行一行を熟読吟味し、行間に思いを潜めつつ思索に耽るという行為に関しては、紙面に印刷された活字文化がより優位に立つ。このことは、何よりも、私どもの経験が教えてくれるところであろう。

「雑誌」の使命と性格は、それを読む者たちが、読むことを媒介として、「思い巡らし」、そのことに「沈潜し」「思いを深める」ことにあるのではないか。今後、雑誌の発行が続けられ、少数ながら「読者」なる者が存在し続けるとすれば、それは、こうした「雑誌の性格」と不可分に結ばれた地平に、新しい「雑誌を媒介とした共同体」が生まれることであると見て、私ども関係者たちはその新しい共同体の誕生を寿ぐべきであろう。

（聖学院大学）